

離島の「隠れ水俣病」を捜せ

辺地医師たちの熱意

自らカルテ再点検

一斉検診 県に踏切らせる

御所浦

天草にも水俣病に類似した症状の患者が見つかり、県は不知火沿岸住民の一斉検診へやると重い腰を上げた。水俣病の熱血はいやというほど知られたが、健康診断で政府から全く無視され続けた島民にも、ようやく日がさそうとしている。県在住民検診へ踏み切らせた背景には、同からのハッパもあるが、県の姿勢を乗り越え、潜伏患者の自主発掘に意欲をそそげた地元医師たちの「告発」が有力な起爆剤になったことは確かだ。



看護婦さんと二人がかりでカルテを点検する御所浦診療所の井上所長

天草郡御所浦町。不知火海をへだてて水俣市からわずか六き。チツ工場の煙が手に取るように見える三つの小島からなる。ナギの目だけ船が通この町は人口約六千八百人。そのほとんどが漁業関係者だ。同町風口(あらくち)の港にそって狭い軒並みの間に身をかがめる町の国民健康保険診療所。三十三年に水俣市立病院の出張所として着足、三十六年町へ移管した。現在のスタッフは、所長の井上寅彦医師(専任)看護婦二人と事務職員。井上さんは昨年三月船大医学部体育医学研究所から着任した。数えて四代目の所長さん。

ガラス戸障子をあけて「先生、おらすかな」声をかけて「オウ」と返事がかえる手狭な診療所は、町民の健康センターだ。どしゃ降りの雨をういてひっきりなしに患者が訪れる。それも老人が多い。

「高血圧、リウマチ、神経痛、腰背中後痛、それに心臓疾患と、ほとんどが辺地病のサンプリミたいなもの。手足のシビレなど水俣病類似の症状はさらにあり、それだけ判別がむずかしくて」。診療机の上には、船大水俣病研究班のレポート「水俣病」が置かれてあった。みて来た患者のカルテは、ここ

五年間ダンボール箱で五箱分、約一万余枚が保存されている。これを忙しい診療、往診、保険事務の合間を縫って「再点検」しようというのだから大変だ。島での唯一の染しめであるラジオ、テレビのニュースの時間だけ。天草での「隠れ水俣病」がクロースアップされていらい、井上医師は潜伏患者のリストアップに没頭している。



町立診療所がある御所浦風口の港

御所浦町は、いま一人開業医がいる。花里登人さん(きんじろう)米大医学部出身で、三十八年秋郷里の町で開業した。花里医師の場合、カルテは年に延べ約一万枚、開業当時からの分がそっくり保存されている。「患者のことなら個人のすべてをのみにしたいので、カルテを見る必要もないのだ」と。再点検した結果、今のところ水俣病の疑いが持たれる症状は見当たらないという。町民の健康を預かるドクターのことは、不安にかられる島の人たちを力づける。

「しかし」と井上医師。「縣庁の場合、特に診察は困難だ。県当局が住民検診をコシを上げたことは歓迎するが、このさい選別性と不平等とマスコ水俣病にも責任と同じような誤差減算をつくり、住民の恐怖と怒りを一掃すべきではないか。いまや予防医学の時代です」雨にける。怒(おん)念の海をながめながら語るその口元には、ただかう辺地医師の決意がみえがっていた。